

現代青年の「保守化」考

大 橋 松 行

一、はじめに—ティーン・エイジャーの世代分類

「中・高校生の間で、上の世代をこう呼ぶのがはやってい
るそうだ。二〇〜二四歳がアダルト、二五〜二九歳はオジン・
オバン。三〇〜三四歳に対しては、さらに厳しく『ご先祖さ
ま』。三五〜三九歳の層はボセキ、つまり『墓石』と突き放
され、四〇歳から上は全部まとめて『化石』で片付けられる」。
これは『朝日新聞』（一九八六年一月一六日付）の「天声
人語」の欄に載った一文である。

彼らのこの分類用語は、今日の若者がよく使用する「セコ
イ」「ダサイ」「クサイ」といった言語同様、転用語であり、
造語である。若者たちを「造語、再生と新しい意味付与、そ

して実際の活用 of 天才」と認める中野収教授は、これらの言
葉のもつ語感について、「対象を再起不能のところまで打ち
すえてしまうような感じがあるが、……対応する心象の中に
明らかに極めて個人的な美意識・倫理意識があり、その主観
によって対象の全部ないしは部分を否定し排除しようという
意思が含まれている。つまり、語感と心象は、記号論的にい
えばシニフィアンとシニフィエは、見事に対応し響きあっ
ている」という。また、若者がこのような新しいことばを造り
だし、さらに既にあることばを新しい意味付けにおいて再生
させることに長けているのは、彼らに「大変生々しい現実感
覚と、極めて感性的な言語感覚」^②がそなわっているからでも
ある。

このような理解のもとで、彼らの先の分類を翻訳してみ

ば、次のように解釈できるのではないだろうか。

今日のティーン・エイジャーの感覚からすれば、彼らが自分たちとかわらうじて交信可能で、意思疎通を図ることができ、感覚的に許容できる世代は二〇歳代までであって、それ以上の世代は、もはや葬り去るべき存在ではあっても、共存共生していける間柄として考えられてはいない。つまり、三〇歳以上の人間は、彼らからみれば「異星人」ならず「異生人」(自分たちとは全く別の次元で異なった生き方をしてきた、また、現にしている人間)なのであって、それは同時に、「過去」の存在であり、「遺物」であることを意味する。ただ、この「異生人」も、三〇歳代は地上にまだその姿をとどめていて、彼らにとって可視的な存在であるが、四〇歳以上の「化石」世代は、もはや彼らの視角の中には全く入っていない。地中深くに葬り去られてしまっているのである。

私たちおとなの世代感覚からすれば、わずかな差異性をこゝとさら強調しようとするこのような世代分類は、一見無意味に思われるのであるが、しかし、それもそれなりに世の中の空気を伝えていると理解するならば、単に若者の茶目っ気たっぷりの戯れごととしてすましてしまうわけにはいかない。なぜならば、世の中の空気が最近往々にして「保守化」ということばで色どられ、さらには、それが「深い保守化」へ進展

する傾向すら示しているからである。

さて、国民の「保守化」とともに、青年の「保守化」がいわれて既に久しくなる。今日では、それは「普通のことば」として使われているが、当の青年たちはそれに対してあえて抗議や異議申し立てをする気配すらない。

私は日本社会の、また、日本政治の今日的状況および将来的展望を考えると、どうにもこの青年の「保守化」が気になるし、さらに、それを「普通のことば」として安易に使用したり、使用されたりすることにも抵抗を感じる。

いま仮りに、青年が「保守化」しているという前提で考えた場合、では、青年の「保守化」はどういう状況からどういう状況に変化したこと、あるいは変化しつつあることをいうのか。その変化は何に起因し、その本質はどうか。ここでは主としてこれらの課題を説明するための糸口を模索してみることと主眼をおくことにする。その意味では、これはまさに若者保守化論序説なのであるが、それへの前段作業(「準備作業」として、保守主義 (conservatism) についてみておこう。なぜなら、「保守化」とは基本的に保守主義への傾斜および保守的傾向の内面化(見方によっては保守回帰)を意味するからである。

二、保守主義について

まず、保守主義ということばに含まれている意味あいからみていこう。例えば、「リベラルズを祝福すると共に保守主義者をも祝福する者」、つまり、「保守主義者の中で最もリベラルな者にしてリベラルズの中で最も保守主義的な者」と自らを位置づけているC・ロシターは、保守主義ということばに次のような四つの意味あいを見出ししている。

第一は、氣質的な保守主義であり、それは人間の生活や仕事や楽しみの仕方、本質的な変化が起ることに反対する「自然の」傾向を意味する。この保守主義は、同じことを同じやり方で行おうとする傾向としての習慣、情性、変化に対する恐怖、そして、一方は集団からのけものにされはしないかという恐怖、他方では集団によって認められたいという願望、この二つの所産である競争心に基づくものである、という。

第二は、所有に基づく保守主義である。これは、地位、名声、権力、財産など、変化によって失われることに對して、どうしても守らなければならない何か大切なものを持っている人々の態度である。

この二つの保守主義は、自己中心的であり、思弁的な思考形態をとらず、いかなる型のものであれ、いかなる方向からのものであれ、およそ変化に反対しようとするものである。

これに對して、實際的な保守主義（＝第三の意味の保守主義）は、彼の個人的な生活の範圍をこえて考え、彼が改革や革命に反対して擁護するにたる社会の一員であることを、莫然とであれ自覺している人間の態度を意味する。この態度を形成する性向の要素として、習慣、情性、恐怖、競争心、保障と確實な所有とに對する願望の外に、社会の一員であるという感覺、政治的社会的急進主義に對する嫌惡ないし恐怖とは、まさに文字通り實際的なものであって、現狀に對する満足感また一体感に基づくものなのである。C・ロシターは、この意味内容をもつ保守主義を最も普通のものとなししている。

そして第四は、哲學的保守主義で、それは最も高次の保守主義である。これは確立された秩序を正当化し、それを下手にいじくりまわしたり、斷乎として改革しようとしたりすることから守るべくあみ出された、いくつかの原理を意識的に遵法している人々の態度である。この保守主義は自覺性、省察、伝統主義そしてある程度の滅私という要素を含んでいる。

以上が、C・ロシターのいう保守主義ということばのもつ四つの意味あいであるが、さらに彼は保守主義をいろいろなイズムから次のように区別している。その中でとりわけ保守主義と同一視されがちなイズム、すなわち、リベラリズム、守旧主義（スタンドパティズム）、反動との比較でみておく。

この比較の中で、彼は保守主義を「変化や改革に対して現存の社会秩序を適宜に擁護しようとする」態度と規定し、それに対して、リベラリズムは、「現在の生活様式にかなり満足はしているが、その理想を裏切ることなく、あるいはその制度を破壊することなく、現在の生活様式を大きく変えることができる」と信じている人の態度、守旧主義は、「一切の反証にもかかわらず、社会は静態的に形成されうるものだと考えている人々の態度」、反動は、「過去を追憶して歎声をもらし、部分的にであれ、あるいは全体的にであれ過去にもどることを、やりがいのあることだと感じる態度」というように理解している。

つまり、保守主義は、現在を容認する点で反動と異なり、現実の社会を動態的なものと認める点で守旧主義と異なる。さらに、変化あるいは改革の可能性についてより悲観的である点でリベラリズムと異なるというのである。そこから、

「変化よりは安定を、実験よりは継続を、未来よりは過去を好む」というところに保守主義者の本性があるという一定の結論が導き出される。

以上は、C・ロシターの保守主義に関する個人的理解であるが、彼の理解をベースにして、次に保守主義のイデオロギー性および本質について検討しておこう。

辞書の定義によれば、保守主義は、「一般的には社会の現行秩序の変革に反対して、それを維持しようとする社会的・政治的立場をさし、進歩主義もしくは急進主義と対照される」とある。

この定義は次の三つの重要な意味内容を含んでいる。その一は、「旧来のものに固執する人間の自然的心理傾向とは異なり一つの社会的立場ないし態度」であること。C・ロシターの類型における「実際的な保守主義」と「哲学的保守主義」がこれに該当する。その二は、「社会の現行秩序の変革に反対」とはいふものの、C・ロシターが理解するように、変化を全く否定するものではなく、「自然的生成と連続性・漸次性が常に強調される」ということである。その三は、「進歩主義もしくは急進主義」と対立するという意味で、保守主義は人対抗イデオロギーでもあるということである。この点についてC・ロシターは、急進主義を、現存秩序に不

満をいだし、徹底した変革に対する青写真をいだし、平和的に抜本的な改革を行おうとする態度である⁽¹²⁾と規定して、保守主義のほゞ対極に位置づけている（より精確には、破壊活動や暴力によって現存秩序を攻撃しようとする態度としての革命的な急進主義と革命的な反動の両方を保守主義の対極に位置づけている）。

ここで、この第三の点に焦点をあててさらに検討してみよう。それは保守主義の本質とも深く関わるものである。K・マイハイムは、その著『保守的思考』の中で、「保守主義者が体系的に思考するのは、進歩主義的な体系に対抗する体系をたてざるをえなくなったとか、過去の進行によって、現実の状況についていかななくなり、これと積極的に取り組んで歴史過程を後退させなければならぬとか、とにかく反動的になったときだけである⁽¹³⁾」と述べて、保守主義が「対抗イデオロギー」⁽¹⁴⁾として体系化されうる——しかも消極的に——のは、一定の歴史的状況の下においてのみであるとして、保守主義は本質的には無体系性（Systemlosigkeit）であること⁽¹⁵⁾を示している。F・ピムにいたっては、「保守主義の強さが適応性にあるとすれば、その主要な敵はイデオロギーだ⁽¹⁶⁾」⁽¹⁷⁾とまで言い切っている。

であるとするれば、保守主義の本質は何なのか。再び辞書的

定義によれば、「保守主義は本来理論的傾向を持たず、現実と理念が一致していることを素朴に確信しており、ユートピア的発想を警戒するリアリズムであり、支配知をその本質とするといえよう⁽¹⁸⁾」とある。

いま一つ、F・ピムの理解をみておこう。彼は次のように述べている。「保守主義者は、人工のユートピアも、金の瓶につながる虹のかけ橋も信じない。私たちは理想社会の青写真に基づいて行動を始めるのではなく、ありのままの現実世界を認識すること、及びその世界をできる限り改善したいと念願することから始めるのだ。私たちは、イデオロギーを、それ自体としても、また、その依って立つ前提たる自己の主張のみが人生で唯一絶対だという考え方としても嫌悪する。……また、一つの教説があらゆる問題を解決しようという信念を否定する。というのは、そのような信念は、人間性、常識、歴史、及び体験に反するものだからだ。保守主義は、私たちの人生に押しつけられるものではなく、かえって人生から学び取られたアプローチである。保守主義は、人生の豊かさと同様性、また、逆説と愚行を理解することから生まれる。保守主義には、ユーモアを解する心が必要だ。保守主義では、人生を個人を基礎としてこそ意味があり、政治の偉大な任務は、個々人の希望、恐れなどの感情を統合して、

調和的な国民を形成することにある。保守主義はイデオロギー的というよりは、実用的な信念である。保守主義は理想を欠いているわけではない。ただその基礎が、机上の空論にではなく、人間的な諸価値にあるということなのだ¹⁶。

これから保守主義の本質の主要な構成要素を取り出してみると、①具体的な個別事象への傾向性¹⁷、②現実認識の重視（リアリズム）と経験主義¹⁸、思考における「解釈的」立場と行為における「意味志向的行為」¹⁹、③人間への忠誠（↑抽象的スローガンへの忠誠）、④論理性の欠如、および無体系性、といったものをあげることができらるだろう。

以上のような保守主義の基本的理解にもとづいて、現代青年の「保守化」について考えていくことにしよう。

三、比較のなかの現代青年像

(1) 現代青年像をとらえる視点

栗原彬教授は、「七〇年代・八〇年代の青年は、表層的な保守化よりもっと根の深い構造的転換に足を踏み入れているようだ」と述べて、現代日本の青年像をとらえるためには、「保守—革新、伝統—進歩のほかにもう一つ、政治—文化なし、まじめ—遊び」という文化意識の軸も加える必要があり、

その重要性は高度経済成長とセットになった私生活主義の拡大によって加速される」と指摘している²⁰。

栗原教授のこの第三の基軸の設定の必要性と重要性に対する指摘は、日本の経済状況が高度成長から低成長へと移行したにもかかわらず、人々の意識構造においては依然として私生活主義的色彩を濃厚にとどめているという実態²¹からして、大いに示唆的である。

いまひとつ、「西欧近代型の普遍的な青年像という規範から今日の青年を解き放ち、歴史的・社会的文脈の中から青年像を再浮上させるという操作²²」もまた必要である。

それは青年の理想的モデルを西欧近代のそれに求めるおとなが、自らの青年期における体験に価値付与を行うと同時に、今日の青年から価値を剝奪して、彼らを一方的に「被告席」に座らせたり、ときには「舞台」に立たせて主役を演じさせようとする、自己対象化を欠いた「おとなの論理」を排除することを意味する²³。あくまでも、△状況▽のなかにおいて、△状況▽に向かい合い、△状況▽とともに客観的に青年像を把握することが要請される。

このような視座から、過去において実施された各種の意識調査の結果を照合することによって、現代日本の青年の意識の構造的特徴の一端を取り出してみることになろう。その際、

青年を基本的に青年中期・後期（一〇歳代後半から二〇歳代）と措置しておく。

以下で、青年の「保守化」の中身を、①政治的保守主義（私はこれにある特定のイデオロギー的な価値基準に基づいて使用される「政治的右傾化」と同義においてとらえることはしない。それは政治的保守主義の一面的理解にすぎない）と、②生活保守主義（生活意識、生活信条、生活価値、生活態度など、社会での生活様式と行動様式における現状肯定・維持志向）との相互連関においてみていくことにする。というのは、後者は関心レベルにおいて、また方向レベルにおいて、さらには行動レベルにおいて多分に前者を規定づける、あるいは規定づけていると考えられるからである。

そこで、一九七八年から毎年暮れに実施している朝日新聞社の「定期国民意識調査」（三〇〇〇サンプル）をベースにしてみていくことにしよう。同社では、過去二〇回の調査データを総合的に分析しながら、日本人の意識の特徴やその変化を追跡した結果を「日本人の素顔」というテーマで一〇回にわたって連載した（『朝日新聞』一九八八年二月九日～二十四日）。その第一回目とところで、「本社の過去一〇回にわたる定期国民意識調査の結果は、若者の生活や政治にかかわる意識が次第に『高齢化』『消極化』、そして『保守化』してき

たことを如実に物語る」（二月九日付）と記している。

(2) 政治的保守主義

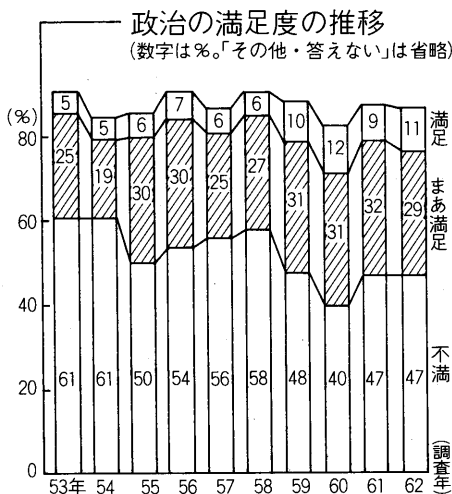
では、若者の政治意識はどう変わってきたのだろうか。それからみていくことにしよう。

① 政治への満足度

政治への満足度の膨みは、この一〇年の定期国民意識調査からみた際立った特徴の一つであると指摘している。グラフ1からわかるように、満足派（満足）「まあ満足」は五三年調査の三〇％から六二年調査の四〇％へと増えたのに対し、不満派（不満）は逆に六一％から四七％に減って、両派はほぼ二分された格好になっている。

一〇年間の推移をみると、「和の政治」を唱えた鈴木内閣が誕生した一九八〇年と、第二次中曽根内閣が発足し、タカ派色を薄めて、行財政、教育、税制、国鉄等の諸改革を強調する「仕事師」内閣をアピールした一九八四年では、満足派の伸長が著しい。それに対して、一般消費税が焦点となった「増税選挙」で自民党が敗北し、その結果、いわゆる「四〇日抗争」を惹きおこした一九七九年と、「角影内閣」あるいは「田中曽根内閣」と評された中曽根内閣が誕生した一九八二年、それに中曽根総理のタカ派の発言が相次いだ一九八三

グラフ 1



出所：『朝日新聞』1988年2月20日付。

年では満足度が下降している。

政治への満足度が、その時々々の政治状況を反映していると
するならば、『協調』や『仕事』などを旗印に掲げる政治姿
勢や手法には好感を持つ一方、いわゆる『政治の醜さやいや
らしさ』、さらには『権力闘争』などには、はっきりと嫌悪
感を示す』（二月二〇日付）ところに日本人の特徴が浮び上
がってくるといえるだろう。

では、若者の場合はどうであろうか。二〇歳代前半の政治

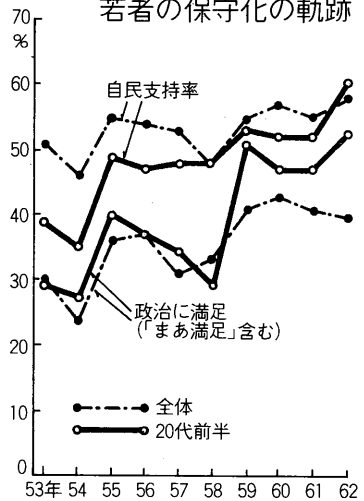
への満足度は五三年、五八年調査を除いて全体平均を上回り、
五九年調査では五〇歳代をしのぎ、六二年調査では六〇歳以
上（五一％）を上回った（五四％）。この数値からみる限り、
明らかに今日の二〇歳代前半の若者たちは、あらゆる世代の
中で最も「保守的」になっていることが理解できるのである。
今井正俊記者が指摘するように、「年齢が加わるとともに保
守的になる一般の傾向からいえば、これは若者の心理構造の
『高齢化』であり、問題意識を持たなくなった『老化』には
かならない」（二月九日付）といえよう。

②自民党支持率

若者の「高齢化」「老化」、いわゆる「若年寄り化」現象は、
自民党支持率の「異常」な高さに裏付けられている。自民党
支持率は、これまで「保守化のパロメーター」（若い人ほど
低く、年齢が上がるほど高くなる）といわれてきた。ところ
が、いまやこの「保守化のパロメーター」は全く意味をなさ
なくなつたというのである。つまり、五五年調査では二〇歳
代前半が二〇歳代後半を上回り、六二年調査では二〇歳代前
半は支持率一六〇％で全体平均を上回り（グラフ2参照）、二
〇歳代後半でさえも三〇歳代・四〇歳代を上回るまでに変化
しているというのである。グラフ2は、若者の「保守化」が、
「ハブニング衆参同日選挙」の行われた一九八〇年を境に大

若者の保守化の軌跡

グラフ 2



出所：『朝日新聞』1988年2月9日付。

大きく進んでいることを示している。今井記者の指摘にあるように、「同日選の自民大勝に、『のった』のであり、まさに大勢に順応した」（二月九日付）のである。

それがまた、政治の流れに変化を求めないという傾向性の高まりとも連動している。朝日新聞社の「選挙前政治意識調査」（一九八六年五月一七日付）によれば、「政治の流れが変わってほしいか」という質問に対して、「変わってほしい」四一％、「変わらないでほしい」四五％となっている。特に二〇歳代前半は「変わってほしい」が全体平均と同じ四一％（三〇歳代前半も同率。一九八三年五月調査では六一％）である。ここにも現状維持志向の若者像が浮き彫りにされている。

る。

③国家意識

国家に対する若者の意識を「世界青年意識調査」によってみると、「（自国）人であることに誇りをもっている」は七割強（一九八三年七〇・七％、一九七七年七〇・四％）で、彼らが誇りに思っているものは「歴史・文化遺産」（一九八三年四八・五％、一九七七年五三・六％）、「科学・技術」（四六・二％、三三・九％）、「教育の水準」（三一・一％、三三・三％）、「文化や芸術」（二六・二％、二九・七％）、「生活水準」（二〇・三％、一一・一％）で、特に「科学・技術」「生活水準」での誇りの増加が著しい。

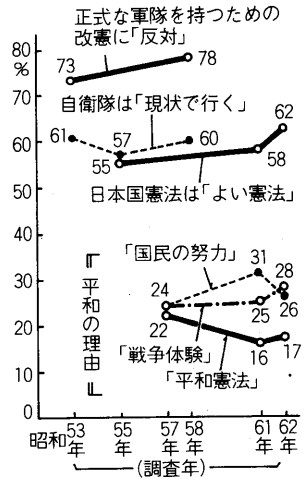
ところが、前回調査との比較でみると、「（自国）のために役立つと思うようなことをしたい」と考えている若者は減少し（三九・七％↑四六・四％）、「役立つと思うようなことはしたくない」者が増加している（二八・五％↑三三・五％）。そのうえ、前者においても、「そのためには、私自身の利益を犠牲にしてもよい」と考えている自己犠牲型の若者は減少し（一六・三％↑二〇・三％）、「犠牲にしたくない」者が増加している（六四・九％↑五九・〇％）。

④憲法意識と国防意識

次に若者の憲法意識についてみておこう。グラフ3は、日

グラフ 3

日本人の平和感覚

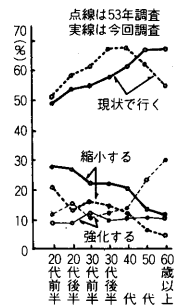


出所：『朝日新聞』1988年2月19日付。

本人の平和感覚（憲法意識、国防意識）を示したものであるが、これから国民の現行憲法に対する評価の高さおよびその上昇傾向が指摘できる。これを男女別でみれば、男性が五五年調査六一％、六二年調査七一％と全体平均を大きく上回っているのに対して、女性はそれぞれ五〇％、五四％で、全体平均を下回っている。しかし、五八年調査によれば、男女間の格差は二〇歳代では極めて小さく、特に二〇歳代前半は男女とも七〇％を越え、しかも女性が男性を上回っている。また、年齢別では二〇歳代・三〇歳代の七割近くが現行憲法を評価している（六二年調査）。いまひとつ特異な現象は、六二年調査では自民党支持者の六五％が評価派であり、それは社会党・共産党支持層のそれを上回る比率を示しているということである。これも若者の自民党支持率の高さと関連して

グラフ 4

自衛隊をどうするか



出所：『朝日新聞』1984年1月3日付。

いるのであろうか。無理なくそのように理解もできる。憲法の評価に関わって防衛意識はどうであらうか。自衛隊の存在に関しては約六割が現状維持派である。だが、グラフ4をみる限り、若者の自衛隊縮小志向は相対的に高く、また、「日本が正式の軍隊を持てるように、憲法を改正する」ことに対しては、二〇歳代・三〇歳代の八割前後が「反対」を示している（全体七八％、五三年調査七三％）。この自衛隊の必要性和憲法第九条の擁護の共存志向は、政治的・軍事的理由によるものというより、むしろ社会的理由、すなわち「災害派遣」の実績と期待によるところが大きいと考えられる。この傾向性は、従来より「革新」政党の主要な支持基盤であるとされてきた青年労働者（労働組合員）にもみられる。労働者教育協会が一九八一年に実施した「青年意識調査」（対象：一〇歳代～三〇歳代。全日自労建設一般労働組合、全日本運輸一般労働組合、日本新聞労働組合連合会など二〇

単産・単組、サンプル数六八〇〇余⁽²⁴⁾と照合してみることにしよう。

①自民党政治の存続については「賛成」は七・九%であるが、「反対」は三六・三%しかなく、特に一九歳以下は一七・八%、二〇～二四歳は三〇・三%と全体平均を大きく下回っている。それに対して、「どちらともいえない」という態度保留派は三七・三%（二〇～二四歳三九・五%）、無関心派は一六・〇%（一九歳以下三五・七%、二〇～二四歳一九・二%）で、明らかに年齢が低いほど、自民党政治に対する拒否反応は鈍くなっているといえる。このことは、政治への満足の高さ、自民党支持率の高さ、あるいは「支持政党なし」層の増加と大いに連関していると考えられる。

②自衛隊についての意識では、存続承認派が四一・三%（一九歳以下四四・三%、二〇～二四歳四二・五%）で反対派の三〇・九%（一九歳以下二〇・七%、二〇～二四歳二六・四%）、態度保留派の二四・八%（一九歳以下三三・二%、二〇～二四歳二八・四%）を大きく上回っている。しかし、「災害救助」が自衛隊の存続を認める理由の第一位にあげられている（第二位：「平和維持」、第三位：「治安維持」）ことからして、政治的・軍事的理由のウェイトの低さが指摘されうる。では、「反動化のバロメーター」となりうる憲法第九条の

改定と徴兵制についてはどうか。憲法第九条の改定については、「賛成」は一・三%にすぎないけれども、明確な反対派は五四・六%で、特に一九歳以下は三九・〇%、二〇～二四歳は四九・三%と全体平均を下回り、「わからない」という態度保留派はそれぞれ二五・六%、四二・四%、三〇・三%となっている。この調査結果では年齢が高くなるにつれて態度保留グループは急減し、「改憲反対が青年の趨勢である⁽²⁵⁾」と指摘しているが、これを額面通り受け取れば、既にみた朝日新聞社の「定期国民意識調査」の結果とほぼ符合することになるであろう。

また、徴兵制については圧倒的多数が反対している（全体七五・九%、一九歳以下五七・八%、二〇～二四歳七三・六%）が、徴兵制が実施された場合の態度選択については、徴兵制拒否派は三六・五%（一九歳以下二三・〇%、二〇～二四歳三四・〇%）で、態度保留派の三六・九%（一九歳以下四〇・〇%、二〇～二四歳三九・一%）とほぼ同じである。このような「徴兵制に反対」でも「そのときにならないとわからない」という若者の徴兵制に対する態度について、山科氏は、「青年自身がいやおうなしに直面するであろう行動の選択について、『そのときにならないかわからない』ということは、国家権力について未知であるのか、あるいは、考

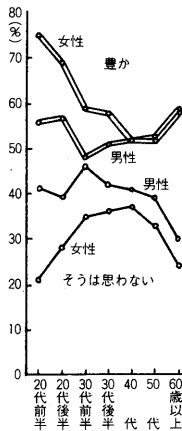
えようとせず場当たり的に態度をきめていこうとすることなのか、政治意識の形成のたちおくれを意味する」と述べて、若者の「政治オンチ」を強調している。

(3) 生活保守主義

では生活面での意識や態度での変化はどうか。六一年調査によれば、国民の五割強（五六％）が「日本人は豊かな生活をしている」ということを肯定している。この傾向は二

グラフ 5

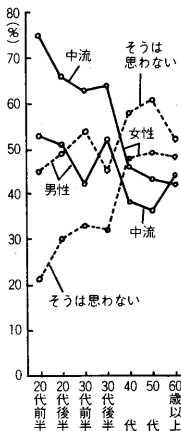
日本人の生活は豊かか



出所：『朝日新聞』
1987年1月3日付。

グラフ 6

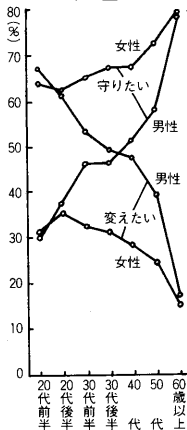
自分の生活は中流か



出所：『朝日新聞』
1987年1月3日付。

グラフ 7

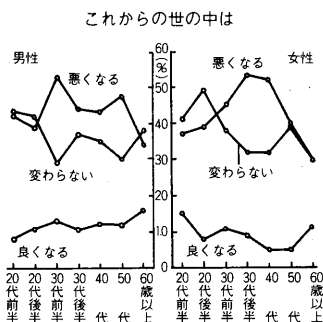
今の生活を



出所：『朝日新聞』
1987年1月3日付。

〇歳代に著しい。その中でも特に女性はその肯定度が高い（グラフ5参照）。これを中流意識の高さとオーバーラップさせてみると、二〇歳代では男女ともきれいに符合する。つまり、相対的に各世代よりも高いのである（グラフ6参照）。ただ、その中味をみれば、それは主として「人並み」という程度のものである（「日本人の生活について」、「中流意識」という言い方がよく使われますが、この「中流」という言葉を聞いて、どんなことを思い浮かべますか」という質問に対して、「人並み」と答えた人の割合は五五％、次いで「ゆとり」が一六％となっている）。この「人並み」の生活を充分だとして満足している人は八五％であるが、ここでは特に二〇歳代の男女では大きな格差（＝対照）を示している。「人並みの暮らして十分」とする二〇歳代前半の女性は九五％なのに対して、二〇歳代前半の男性の三二％は「満足できない」としている。これはさらに、「今の生活を守りたい」という

グラフ 8



出所：『朝日新聞』1987年1月3日付。

ことになると、二〇歳代前半の男女はまさに正反対の意思表示をしている（グラフ7参照）。

若い女性の生活面における現状肯定・維持志向の高さを浮き彫りにしている格好であるが、これは六二年調査でも立証されている。「今を幸せ」としているルンルン女性は八三％（男性七一％）であるが、特に二〇歳代後半から三〇歳代前半の女性では九割にも達しているという（『朝日新聞』一九八八年一月一日付）。

現在を「ハッピー」だととらえている若者のこの感覚は、政治・景気・世相といったものを含めた「世の中」の今後の推移に対しても、他の世代とは対照的で、より「楽観的」とらえ方をしている（グラフ8参照）。

しかしながら、若者の現在のこの「ハッピー」感も、老後の生活への不安感とセットになっていることを見逃してはならない。不安の増加が一番大きいのは二〇歳代後半で、五三年調査の三一％から、六二年調査では五八％へとほぼ倍増した。特に女性では六七％で、四〇歳代・五〇歳代女性並みの強い不安を示しているという（二月一八日付）。

ところで、このような若者の現状肯定的・現状維持的な志向性は、明らかに社会に対する満足度の高さととなって反映している。例えば、総務庁青少年対策本部が一九八六年一月一日に発表した「現代の青少年」と題する調査報告書では、「家庭に悩みや心配ごとがない」八九・九％、「学校に対して満足」八〇・一％、そして「社会に対して満足」五五・四％（「社会への不満全然ない」八・二％、「あまりない」四七・二％。一九七〇年調査三三・二％）で、不満派の四四％を上回っている。これは、「世界青年意識調査」での家庭生活の満足度の高さ（一九八三年七四・六％、一九七七年八〇・二％）、学校生活の満足度の高さ（六五・三％、六二・四％）、社会に対する不満派の減少（四九・二％、五七・四％）、満足派の増加（四〇・七％、三五・二％）という結果においてもほぼ類似の傾向性を読みとることができる。

また、たとえ社会に対して不満を持ったとしても、そのと

きにとる若者の態度は極めて消極的であつたり、ミイイズム的である。「世界青年意識調査」では、「選挙権を行使する以上の積極的な行動はとらない」四一・一%（一九七七年調査三九・三%）、「社会のことには、かわり合いを持たないようにする」一六・五%（二三・四%）で、両者とも前回調査よりも増加している。それに対して、「合法的範囲で積極的な行動に訴える」は二六・〇%から二〇・六%へと減少している（この比率は一一ヶ国中最低である）。積極的な行動をとらない理由の約七割（六八・一%）が「個人の力では及ばぬところに問題があるから」となっている（この比率は一一ヶ国中最高である）。

いまひとつ、男女観についてみると、「仕事は男性が中心、家事・育児は女性为中心であるべきだ」という考え方に対して、六二年調査では賛成五四%（反対三一%）で、五年調査の七二%、六〇年調査の六〇%を下回り、「男は外、女は内」という伝統的な男女の役割分担意識が大幅に弱まっていることを示している。この傾向性は女性、若者層に強く、六二年調査では二〇歳代・三〇歳代の女性では賛否が逆転し、二〇歳代前半の男性も賛成四五%、反対四〇%で、他の世代に比べて、比較的男女分業に批判的である。

ところが、「あなた自身は、女性のもとで働きたいと思

いますか」という質問に対しては、「思わない」が過去三回の調査（五五年、五九年、六〇年）とも五割以上で、特に、男性では若者から高年齢層までおしなべて七割前後が拒否反応を示しているという。建前のうえでは（一般論では）男女平等、女性の社会進出を是認してはいても、女性上司には依然として拒否反応を示すというように、それがいざ自分自身に関わる問題となると話は別で、若者（特に男性）においても男性優位の社会観が根強く残存していることを、これは物語っている。

四、まとめにかえて

以上、若者の政治的保守主義と生活保守主義を示すと思われる具体的な意識や態度について、各種の調査結果を照合する作業を通してみてきたが、ここで、それらを整理しておくことにしよう。

今の若者は、総じて、生活の面において、「今ある状況」を「豊か」だと感じ、自らも「中流」（一人並み）の生活をしていると感じ、それに一応満足し、今後もこのような状態が続くことを望んでいる。この傾向は概して男性よりも女性に強いが、また、この現状肯定的・維持的な態度、ハッピー

感の背後には将来における「不安感」がセットになって横たわっている。

これが、「今ある社会状況」、「今ある政治状況」、「今ある国家状況」に対する肯定と維持に連関している。今の若者は、「今ある」自分自身の生活状況の肯定、その維持存続という前提において今の社会に満足し、このような社会的・文化的状況を創り出した「政治のあり方」を戦後政治を主導してきた自民党政権により強い支持を示すことによって、また、「国家のあり方」においても、現行憲法を規範とすることにおいて認知していると考えられる。もっとも、彼らにとって現行憲法は所与のものであるので、それに対して、どれだけ遵守すべき「規範」として意識的に認識し、内面化しているかはなほ疑問ではあるが、少なくとも、今の生活や社会を支えている規範としては支持していると考えられる。

このような理解を前提にすれば、自衛隊の規模や役割における現状維持での存続支持も、憲法第九条改定の拒否も、徴兵制導入の拒否も、またその限りでの自民党政権存続支持も理解することができる。つまり、「今ある状況」は彼らにとって「価値ある状況」なのであって、それからの逸脱はこの「価値ある状況」を通過させるか、もしくは究極的に崩壊させてしまうものとの共通認識がそこにある。彼らにとつて

「現在」が全てであり、「現在」こそ価値判断の絶対的基準を置くにふさわしいのである。まさに、「若者たちは、単に昔の良さや、改革を好まない保守回帰をしたのではなく、ただ、現状をどう享楽するかに価値を置いている」のである。そのことは、「若者の日常的な生活にとって、政治的想像力と歴史的意識が無意味になった」ことを意味する。

中野教授は言う。「今ある政治は、この平凡で快適な生活を成立させた要因のひとつである。政治のどこに、不都合なところがあるというのか。政治的世界には、たしかに正視にたえぬ醜態がみえかくれているけれど、総体としてみれば、享受すべき社会的・文化的装置と機会をほどほどに整備し、おおむね社会的平等を実現し、社会的富の分配・再分配も大過なくやった。小さな瑕疵はあるにしても、全面的に否定するいわれもない。しかも、保守と革新を含む全政治体制がひとつの装置として作用した結果が、これなのだ。実際、保守と革新は、対立者としてでなく相互補完者として機能してきたのではないか。そういう認識というか、直感的な把握があれば、『保守対革新』が死語になり、現実性のない概念となって当然なのだ。したがって、政治的世界とは、常時意識し思考し判断しなければならぬ当為の世界ではなく、著しい逸脱さえなければ意識外に置いておくべき所与の世界、前提で

しかない存在の世界にはかならない。関心をもつことのほうが、余程、異様なのである」⁽²⁹⁾と。

かくして、若者の意識構造の中から「政治」と「歴史」が消えて行き、保守・革新で整序された伝統的パラダイムは消滅していくのである⁽³⁰⁾。

確かに、このような理解にたてば、現在の若者は浅田彰氏がその著『逃走論』（筑摩書房、一九八四年）の中で提示した蓄積型の人間ではなく、逃走型のスキゾ人間である。このスキゾ型人間は、既に指摘したように思考と行動の価値基準を「現在」におく、と同時に、これまでの人間が規範としてきた「真面目」「努力」「自己犠牲」を拒否し、「遊び」「ほどほど」「自己忠実」「自己主張」を絶対的価値規範としている。

千石氏はこのような人間をモラトリウム人間とは異質な「表現主義人間」ととらえて、この新しいタイプの人間を次のように特徴づけている。「モラトリウム人間は、社会の決めた青年の役割と対立し、意識的にこれを拒否する。モラトリウムの真髓がそこにあった。しかし、新しい表現人間は、社会的役割や責任に、モラトリウム人間のように、抵抗し対立し拒否しない。少なくとも抵抗運動は起こさない。むしろ、その役割は役割として、受け入れようとしている。ただ、モ

ラトリウム人間と違って、その役割に献身しようとはしないのだ。役割を犠牲的に果そうとはしないのである。新しい表現人間は、体制の持っていた秩序と対立しないで、新しい遊びの分野で自己表現をしようとする。その自己表現法は、決して消極的なモラトリウム人間ではなく、……、積極的であり行動的である」⁽³¹⁾。

既にみた栗原教授の第三の基軸に基づいていえば、今の若者は、政治的であるよりも文化的であり、「真面目」的であるよりも「遊び」的である。彼らにとっておとなの規範である「真面目」や「努力」や「自己犠牲」はパロディやコミックとしての「マジメ」であり、「ドリョク」であり、「ジコギセイ」なのである。同じように、「政治」も「国家」も「社会」も、また、「セイジ」であり、「コッカ」であり、「シャカイ」なのである。これは、「何ものにも、何ごとにもコミットせず、ことがらから常に一定の距離を保っているための方法であり自己表現と自己確認のためのスタイルでもある」⁽³²⁾。

とにかく、彼らは過去との歴史的連続性を否定し、ことさらそれとの断絶を意識することによって「自分自身」であろうとする（しかし、ある面では、たとえば男女観に関する意識においてみられたように伝統主義的要素もあわせもって

るという点において歴史的連続性を有しているけれども)。それは時には、ものごとに対してノン・コミットメントであったり、また、ある時には新しいスタイルのコミットメントであったりする。例えば、政治における「現代型無関心」は前者の典型であり、これまでの「真面目」な政治に「遊び」の要素を注入して「セイジ」化した、あの一九八三年の北海道知事選挙における「勝手連」の行為は後者の典型である。

このように考えてくれば、今日の若者の「保守化」は、明らかに既にみた保守主義の本質的部分を多分に共有しているといえる。しかしながら、彼らの「保守化」が極めて柔構造化した社会状況の中での現象であることを鑑みれば、この「保守化」は深化することはあっても、また逆に、「保守深化」にブレーキをかけて反転することはあっても、「反動化」へ転換することはないであろう。少なくとも、彼らが率先して「反動化」したり、「反動」と結合することはありえない。彼らの「保守化」もまた十全に柔構造的であるからだ。

註

(1) 中野収『まるで異星人——現代若者考——』有斐閣、一九八五年、八三頁。

(2) 中野収『前掲書』七八頁。

(c) Clinton Rossiter, *Conservatism in America, the Thankless Persuasion*, second edition, revised, Vintage Books, New York, 一九五〇、一九六二。アメリカ研究振興会訳『アメリカの保守主義——伝統と革新との交錯——』有信堂、一九六四年、五頁。

(4) K・マンハイムは、この「自然的保守主義」を、ひとつの特殊に歴史的な近代の現象としての保守主義と区別して「伝統主義」とよんでゐる (K.Mannheim, "Das Konservative Denken. Soziologische Beiträge zum Werden des politisch-historischen Denkens in Deutschland", 一九三〇。石川康子訳「保守的思考」樺俊雄監訳『マンハイム全集 3 社会学の課題』一九七六年、潮出版社、一二二頁)。

(5) C・ロシター『前掲訳書』九〇―一二三頁。

(6) C・ロシター『前掲訳書』一四―一五頁。

(7) 保守と反動に関する北岡勲教授の次の指摘は示唆に富む。「保守反動と呼ばれるように、保守と反動とは、たえず結びつけられることが多いが、この両者は必然的に結びつくのではなく、保守主義者が現存の社会秩序を擁護し得ずして、しかもなお、過去のものとなったその秩序を回復しようとする時のみ、保守主義者は反動主義者となり、保守と反動とは密着する」(北岡勲『保守主義研究』御茶の水書房、一九八五年、「はしがき」一頁)。

- (8) C・ロシター『前掲訳書』一五頁。
- (9) 見田宗介・栗原彬・田中義久編『社会学事典』弘文堂、一九八八年、八二二頁。
- (10) 濱島朗・竹内郁郎・石川晃弘編『社会学小辞典』有斐閣、一九七七年、三五九頁。
- (11) 濱島朗・竹内郁郎・石川晃弘編『前掲書』三五九頁。イギリス保守党のベテラン政治家のF・ピムは次のように述べている。「保守主義者は、変化そのものには反対しない。実際、人生についてただ一つ確かなことは、それが変化することだ」と私たちは認識している。確かに、私たちは、変化と進歩を同一視しないし、異常な変化や、異常なスピードでの変化には、常に抵抗してきた。私たちは、自然なリズムでの変化を認めるのであって、不当に強制したり、押しとどめようとしたりするのとは同意しない」(Francis Pym: *The Politics of Consent*, Sphere Books; 1967, sec. ed. 1969, 戸沢健次訳『保守主義の本質』中央公論社、一九八六年、三〇四〜三〇五頁。傍点…筆者)。
- (12) C・ロシター『前掲訳書』一四頁。
- (13) K・マンハイム『前掲訳書』三三頁。
- (14) F・ピム『前掲訳書』三〇三頁。
- (15) 見田宗介・栗原彬・田中義久編『前掲書』八二二頁。
- (16) F・ピム『前掲訳書』三〇三〜三〇四頁。
- (17) K・マンハイムはこのことについて次のように述べている。「保守主義は、つねに直接的な個別事象から出発し、その地平を自己の特定の環境以上には拡大しない。それは、直接的行為、具体的な個別事象の変更を志向しており、したがって、本来、そのなかに自分が生きている世界の構造について思いわずらったりはしない」(K・マンハイム『前掲訳書』三一頁)。
- (18) K・マンハイムは、「保守主義者は現在を、過去の最後の段階として体験する」と述べている(K・マンハイム『前掲訳書』四九頁)。
- (19) K・マンハイムは、進歩主義的思考における「機械的」立場に対して保守的思考における「解釈的」立場を、また、伝統主義的行為における「反動的行為」に対して保守的行為における「意味志向的行為」を位置づけている(K・マンハイム『前掲訳書』一七頁、四九頁)。
- (20) 栗原彬『やしのゆぐえ』現代青年論』筑摩書房、一九八一年、一六七〜一六八頁。
- (21) 例えば、第三回世界青年意識調査(総理府青少年対策本部、一九八三年二月〜六月、一ヶ国)で、日本は「個人生活志向」(「もっとも大切なことは、自分自身の生活を充実させることである」)が五四・三%で第五位(一九七七年の第二回調査では五五・三%で第四位)、それに対して「社会生活志向」(「それだけでは十分ではなく、社会のためにも役立つことをしたい」)

は三三・二％で、西ドイツに次いで低い(第二回調査では三一・九％で最下位)という結果が、そのことの一端を示している(総理府青少年対策本部編『世界の青年との比較からみた日本の青年』大蔵省印刷局、一九八四年)。

(22) 栗原彬『前掲書』一七二頁。

(23) 例えば、この危険性は、朝日新聞社の第六回定期国民意識調査の結果からも指摘できる。二〇歳代・五〇歳代に対する国民の感じ方についての質問で、二〇歳代が「自分勝手」(三六％、五三年調査四一％)、「無気力」(一九％、一四％)、「行動的」(一七％、一九％)、「無責任」(一三％、一一％)の順になっているのに対して、五〇歳代は「ねばり強い」(二九％、二六％)、「責任感が強い」(二五％、二五％)、「思いやりがある」(一三％、一三％)となっており、両者は明らかに対照的な位置づけがなされている(『朝日新聞』一九八四年一月三日付)。

(24) なお、この調査結果は、竹内真一監修・労働者教育協会編『労働青年白書——青年は保守化しているか——』(学習の友社、一九八二年)に集録されている。

(25) 山科三郎「政治意識はどうなっているか」竹内真一監修・労働者教育協会編『前掲書』一二四～一二五頁。

(26) 山科三郎「前掲論文」一二七頁。

(27) 千石保『現代若者論——ポスト・モラトリウムへの模索——

——』弘文堂、一九八五年、三四頁。

(28) 中野収『前掲書』一一一頁。

(29) 中野収『前掲書』一二六頁。

(30) 中野収『前掲書』一二七頁、一一九頁。

(31) 千石保『前掲書』四二～四三頁。

(32) 中野収『前掲書』一〇七頁。

(同志社大学人文科学研究所・研究協力者)